

# 高冷地への山上げを活用した洋ラン主体経営 ～父から受け継いだ経営を次の世代につなぐ～

豊田市 原田恒夫さん  
施設花き（洋ラン）

【平成28年9月20日掲載】

高冷地への山上げを活用して、シンビジウムを主体に、趣味家向けの様々なランや顧客の要望に応じた花苗の生産を取り入れ、父から受け継いだ経営を次の世代につなぐ役割を果たすために取組を進めている、豊田市の原田恒夫さんをご紹介します。

## 多彩な経験を経て、父の経営を継ぐ

農家の長男として育った原田恒夫さん。父は水稻とシンビジウムを経営する一方で、公益社団法人全国愛農会（以下「愛農会」という。）の主要メンバーでした。愛農会は有機農業の普及等を行っている団体で、三重県伊賀市に愛農学園農業高校を設立しています。「父が愛農会に関わり過ぎていて、農業を継ぐ気はなかった。」と原田さん。父の関わりが深い愛農学園農業高校ではなく、姉が通っていた基督教独立学園高校（山形県）に進学しました。



原田恒夫さん

高校を卒業した原田さんは、父の勧めで海外へ研修に行くこととなります。行き先はイスラエル。キブツ（集団農業共同体）で約1年3か月間、ボランティアとして働きました。

こうした多彩な経験を経て、20歳で帰国した原田さんには、父の経営を継いで就農することが自然の流れとなっていました。最初の2年間は家で働きながら農業大学校の研修を受講するなど、知識や技術の習得に努め、25歳で経営移譲を受けました。

## 苦難を乗り越える転機となった施設の移転

900坪の温室で7,000鉢のシンビジウム生産を始めた原田さん。順調な経営を続けていましたが、景気の減退の影響を受けて、次第に暗い影が忍び寄ってきました。シンビジウムの価格が低迷する一方で、燃油や資材の経費が高騰したのです。当時の施設は昭和49年に農業構造改善事業で建てられたガラス温室団地で、共有ボイラーによる集中暖房である上、施設内の容積が大きいため暖房効率が悪く、経費の負担がシンビジウム経営に重くのしかかってきました。

そんな折り、伊勢湾岸自動車道の建設計画が持ち上がり、温室の移転を余儀なくされたのです。これを機会に周囲の洋ラン農家の多くが廃業していきました。しかし、原田さんは、父から受け継いだ経営を続けることを決心します。移転先を見つけ、シンビジウム栽培に適した、低コストで生産可能な施設を建設しました。「移転しなければ廃業の危機だった。」と振り返る原田さん。これを転機として苦難を乗り越え、経営は徐々に好転していきました。

## 仲間と共同で「山上げ」

原田さんが所属している豊田洋らん研究会では、6戸の会員が共同で高冷地（設楽町駒ヶ原地区；標高約 900m）に土地を借りてパイプハウスを建て、シンビジウムの山上げを行っています。高温による生育の遅れや蕾の落下を防ぎ、高品質なシンビジウムを生産するためです。「一人では山上げはとてもできない。仲間がいるのは本当にありがたい。」と原田さん。山上げ期間中（6月中旬～10月中旬）は、会員が毎日交代でかん水を行うほか、ほ場周辺の除草やかん水用ため池の清掃などを共同で実施しています。



山上げ作業

## 新たな品目への挑戦

「これ以上、シンビジウムの単価向上を期待するのは難しい。10年前に就農した息子が主体となって、新たな品目に挑戦し、経営の安定を図っている。こうした取組をバックアップしていきたい。」と語る原田さん。

その一つは、趣味家向けの様々なラン。全国各地の視察や市場への訪問により品種動向の情報を収集するとともに、海外の原種の生産にも取り組み、その数はミニカトレアを始めとして100種類を越えるまでになっています。「各地で開催される洋ラン展に、日本全国はもとより、海外へも出かけることができた。これもランを生産していたおかげ。イスラエル滞在時にヨーロッパ各地を1か月かけて回ったことも役に立った。」と原田さん。今ではそのほとんどを洋ラン展で販売しています。

もう一つは、花苗の生産。シンビジウムを庭先まで買いに来られる顧客のみなさんの要望に応じる形で、ビオラやパンジーなどの苗の生産・販売を始めました。当初は秋だけの生産でしたが、今では春にも生産し、年間1万鉢以上を庭先で販売しています。「この花苗は地域の環境美化にも使用されていますよ。」と話していただきました。

## 父から受け継いだ経営を次の世代につなぐ

原田さんに今後の展望を伺うと、「生産したシンビジウムの約5割は庭先販売。買いに来られる顧客のみなさんのためにも、A級品（3本立ち以上）を増やしたい。気象変動が激しくなっているので、山から下ろすタイミングが難しい。毎年が挑戦です。顧客の要望に応じた品目拡大の取組も進めて、父から受け継いだ経営を次の世代につなぐ役割をしっかりと果たしたい。」と力強く語っていただきました。



シンビジウム

執筆：農業経営課

取材協力：豊田加茂農林水産事務所農業改良普及課